

平成16年度「文化庁日本語教育大会」
(東京大会)
日本語教育研究協議会

平成15年8月4日(水)
昭和女子大学

主催

 文化庁

目 次

○プログラム

○日本語教育研究協議会 各分科会の協議内容

- 第1分科会「年少者への日本語習得支援について考える」 2
- 第2分科会「地域の日本語学習支援の方法 ー施策の展開ー」 6
- 第3分科会「異文化間カウンセリングの活用 ー判断留保(エポケー)の
実践ー」 8
- 第4分科会「年少者への日本語習得支援の関係者を支える知識・技術・
心構え」 14
- 第5分科会「地域の日本語学習支援の方法 ー授業のヒントー」 18
- 第6分科会「学習者を支える教材の活用方法」 26

プログラム

平成16年8月4日(水)

13:30 ~ 15:30 日本語教育研究協議会(第1~3分科会)

15:30 ~ 15:45 休憩

15:45 ~ 17:45 日本語教育研究協議会(第4~6分科会)

日本語教育研究協議会
各分科会の協議内容

第1分科会（グリーンホール）

- テーマ：「年少者への日本語習得支援について考える」
- 趣 旨：文化庁委嘱事業「親子の日本語教室」の事例や「学校教育におけるJSL（第二言語としての日本語教育）カリキュラムの開発について（小学校編）」（平成15年7月文部科学省）などを参考にして、年少者への日本語習得支援の在り方について考えるとともに、実践的な支援方法について紹介する。
- 講 師：大 蔵 守 久（（財）波多野ファミリスクール主管）（敬称略）

大蔵 守久（おおくら もりひさ）

財団法人波多野ファミリスクール主管

専 門：年少者日本語教育

略歴等：小学校勤務時に帰国児童と出会ったことがきっかけで、昭和57（1982）年に（財）波多野ファミリスクールに転職。平成10（1998）年まで同財団の文部省（当時）研究委嘱部門の国際学級で指導に当たる。昭和63（1988）年から国や都府県の依頼で教員研修の講師を始め、多い年は年間40か所で講演や公開授業を行う。また、文化庁や文科省の施策に関する委員を務めるほか、「日本語学級」などのテキストの執筆をしている。

主著書：『日本語学級』シリーズ1・2・3（凡人社）
『日本語授業おもしろネタ集』（凡人社、共著）
『日本語を学ぼう』2・3（文部省、共著）
『たのしい日本語』中学年編（小学館、共著）他

<メモ>

東京大会 第 1 分科会 「年少者への日本語習得支援を考える」資料

1. 年少者への日本語指導の「難しさ」

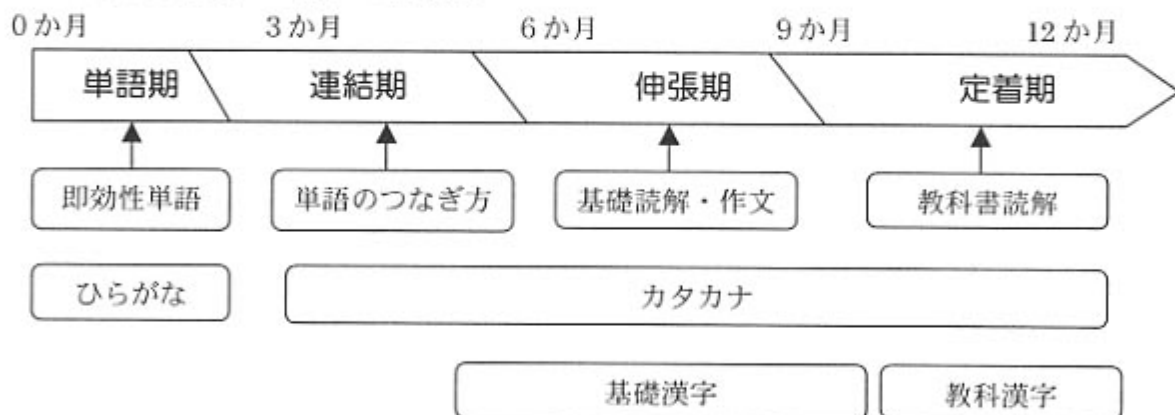
「難しさ」の背景にあるもの

- ①「文法」「文型」という捉え方ができない年齢
- ②「母語」の確立が不十分
- ③「学校」という社会のもつ難しさ
- ④「動機付け」の難しさ

2. 「難しさ」解消のヒント

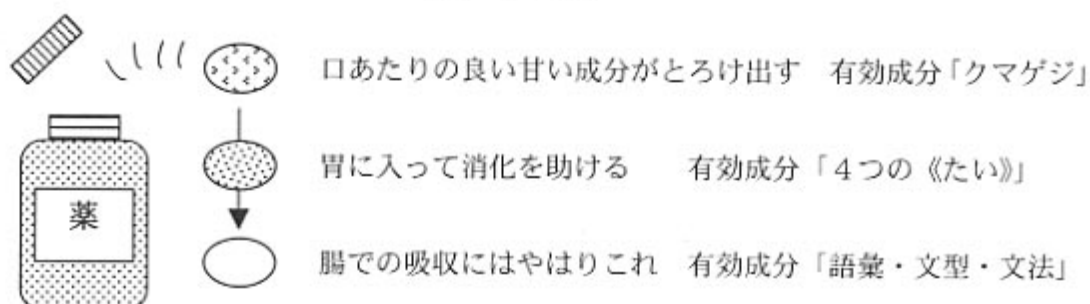
- ①場面对応型授業・一事習熟型授業
- ②非言語的アプローチとの組み合わせ
- ③「言葉」の背景にある「学校文化」の理解が不可欠
- ④「面白い」「分かった」に勝る《クスリ》なし

3. 「言語習得段階」に合わせた指導



4. 「言語習得特性」に合わせた指導

学習意欲不振・消化不良・吸収不良に効く《お菓》



5. 親子日本語教室（文化庁：学校の余裕教室等を活用した親子参加型の日本語教室）

- ① 日本語学校との違い
- ② 「幼児への日本語教育」という新たな課題
- ③ 「親子一緒」ということ⇒「親子一緒」だからできることに目を向けて
- ④ 地域を巻き込む絶好の機会

6. J S Lカリキュラム（文部科学省：学校教育におけるJ S Lカリキュラム小学校編）

- ①大蔵の目から見た文部省の施策の変遷
帰国子女「等」の時代 ⇒ 日本語教育の時代 ⇒ 心理学等との融合の時代
- ②従来型カリキュラムとの違い
授業づくりのツール AU（学習活動単位）という考え方
- ③J S Lカリキュラムの課題
カリキュラムを実践する環境づくり
教科内容がからむ指導の対応
覚えさせる工夫

7. 親子日本語教室の実践例

第2分科会（80年館オーロラホール）

- テーマ：「地域の日本語学習支援の方法－施策の展開－」
- 趣 旨：文化庁「地域日本語教育活動の充実方策に関する調査研究協力者会議」の成果を踏まえながら、地域の日本語学習支援の在り方についてさまざまな観点から考える。
- 講 師：松本 茂（東海大学教授） (敬称略)

松本 茂（まつもと しげる）

東海大学教授（コミュニケーション教育学専攻）

専 門：コミュニケーション教育学

略歴等：現在、日本コミュニケーション学会理事、日本ディベート協会専務理事、中央教育審議会教育課程部会専門委員、文部科学省SELHi企画評価会議協力者などを務めている。また、これまでに高等学校学習指導要領外国語編・作成協力者、文化庁・地域日本語教育活動の充実方策に関する調査研究協力者会議座長、NHK教育テレビ英会話番組講師（計4年間）なども務めた。

主著書：『頭を鍛えるディベート入門』（講談社ブルーバックス）

『異文化コミュニケーション・ハンドブック』（有斐閣、共著）

『生徒を変えるコミュニケーション活動』（教育出版、編著） 他

<メモ>

第3分科会（学園本部館大会議室）

- | |
|--|
| ○テーマ：「異文化間カウンセリングの活用 -判断留保(エポケー)の実践-」 |
| ○趣 旨：日本語教育現場で不可欠な実践力の一つである「相手の話を十分に聞く力や話を引き出す力」を身につける際に有効な方法の一つである判断留保の技法について紹介する。 |
| ○講 師：渡 辺 文 夫（上智大学教授） |
| （敬称略） |

渡辺 文夫（わたなべ ふみお）

上智大学文学部教育学科教授，博士（心理学）

専 門：異文化間心理学，異文化教育

略歴等：上智大学文学部卒，上智大学大学院文学研究科修士課程修了。米国東西センター文化学習研究所専門研究員，フィリピン大学大学院上級講師，フィリピン心理学研究研修所異文化関係部門部長，東北大学文学部助教授などを経て，平成9（1997）年10月から現職。現在，異文化間教育学会理事。平成13（2001）年度から「日本語ボランティア活動支援・推進事業委員会」（文化庁委嘱事業）主査を務めている。

主著書：『異文化のなかの日本人』（単著：淡交社）

『異文化と関わる心理学』（単著：サイエンス社）

『異文化接触の心理学』（編著：川島書店）

『国際化と異文化教育』（編著：至文堂）他

<メモ>

<メモ>

[渡辺文夫 2002 異文化と関わる心理学 サイエンス社より抜粋]

●「統合的關係調整能力」の課題

「統合的關係調整能力」の育成で課題となるのは、次の三つの点です(渡辺 2000)。
①「関係」が変ることによって認識や行動が変ること、②「関係」優位な認識を持ち行動をすることによって異文化関係の問題に効果的に対処できること、③これら二つを学習者の全体的な意味づけのなかで統合的に「構成」すること。少し専門的な言い方で説明すると①は、「異文化接触では主観と客観が乖離していても『関係』は独立し機能する」という命題を学習すること、②は、「対人的な相互関係を活性化することによって効果的な異文化間行動が行なえる」ことを学習すること、③は、「①と②を学習者が自らの意味づけにおいて構成し、統合的に経験的に学習する」ことです。①と②に関しては、現象学的な考えを、③に関しては構成主義(Constructivism)的な考え方を基盤に置いて方法を開発しました。

2. 統合的關係調整能力育成のための教育実習法

1) 現象学に基づく異文化教育法

●エポケー実習：判断留保の訓練

エポケー(Epoch)実習は、上で述べた①「『関係』が変ることによって認識や行動が変る」ことを経験的に学習する方法です。エポケーというのは、現象学の中核にある認識のための意識操作の方法です。通常は判断停止あるいは判断中止と訳されますが、ここでは判断留保と訳すことにします。この意識操作の方法は、自らが認識しているものや事象が自らと離れて客観的に存在していると考えず、その認識を絶えず括弧のなかに入れ、より慎重に知ろうとする認識の方法です。認識した物事や事象が、絶えず新たな姿で認識されるようになります。

エポケー実習は、以下に示した順序で行われます。

【エポケー実習の手順】

1) 第一ステップ：絵を描いての実習

- ・二人一組A Bのペアを作る。
- ・「自分にとって大切なこと、もの、ひと」を絵に描く。
- ・Aは、Bに自分の絵を説明する。
- ・Bは、Aの説明を聞き、「あなたは、～を大切に感じているのでしょうか？（上あがりの口調で）」と自分の理解を断定せずに、共感的に慎重に「確かめる」。この時、質問や自分の考え、思い、判断、意見などを言わない（いったん意識の脇に置く）。[ここでの一連の意識の作業がエポケーになる。]
- ・Aは、Bの「確かめ」を聞き、さらに話を続ける。
- ・Bは、さらにそのAの話を「確かめる」。
- ・話が収束するまでこれを繰り返す。
- ・講師は、AにBから「確かめ」を受けてどのように感じたかを発言させ、その発言に対してエポケーをし「確かめる」。

2) 第二ステップ：話題を設定しての実習

- ・二人一組A Bのペアを作る。
- ・話題（たとえば「海外派遣の自分にとっての意味」など）を提示する。
- ・Aは、Bに話題についての自分の考え、気持ち、思いを述べる。
- ・Bは、Aの説明を聞き、「あなたは、～を意味があると感じているのでしょうか？」と自分の理解を断定せずに、共感的に慎重に「確かめる」。この時、質問や自分の考え、思い、判断、意見などを言わない（いったん意識の脇に置く）。
- ・Aは、Bの「確かめ」を聞き、さらに話を続ける。
- ・Bは、さらにそのAの話を「確かめる」。
- ・話が収束するまでこれを繰り返す。
- ・講師は、AにBから「確かめ」を受けてどのように感じたかを発言させ、その発言に対してエポケーをし「確かめる」。

(渡辺 2000)

エポケーとは

渡辺 文夫
(上智大学)

Epoch (エポケー) は、「判断中止」あるいは「判断停止」と訳されます。ケンブリッジ哲学事典を見ますと、「私たちが、現象学的な姿勢をとる時に、自然な姿勢の行為、意図、確信を留保します。このことは、疑ったり否定することではありません。距離をとりその構造を凝視し熟慮する事を意味します。フッサールはこの留保を現象学的なエポケーと呼んだ」と説明されています。生きている限り判断することは止みませんので私は、「判断留保」の方がそもそもの意味に近いのではないかと考えています。

自らが認識しているものや事象が自らと離れて客観的に存在していると考えず、その認識を絶えず括弧のなかに入れ、より慎重に知ろうとする認識の方法です。認識した物事や事象が、絶えず新たな姿で認識されるようになります。

異文化接触では、主観と客観の乖離が大きく、本質の理解よりも先に関係優位の姿勢が大切になると思われます。エポケーは関係優位の姿勢をとるための優れた意識の操作法であると私は考えています。

第4分科会（学園本部館大会議室）

- テーマ：「年少者への日本語習得支援の関係者を支える知識・技術・心構え」
- 趣 旨：年少者に対する日本語教育の関係者にはさまざまな知識・技術が必要であると同時に基盤となる心構えも必要と考えられる。ここでは、言語技術を活用した学習方法について紹介するとともに、日本語教育の現場で何らかの形で生かす方法について考える。
- 講 師：三森 ゆりか（つくば言語技術教育研究所所長） （敬称略）

三森 ゆりか（さんもり ゆりか）

つくば言語技術教育研究所所長

専 門：言語技術（Language Arts）教育

略歴等：上智大学外国語学部ドイツ語学科卒。丸紅勤務後上智大学大学院中退。平成2（1990）年つくば言語技術教育研究所開設。麗澤中学・高等学校非常勤講師，（財）日本サッカー協会コミュニケーション・スキル専任講師，茨城県立中央看護専門学校講師，朝日カルチャーセンター講師などを務める。

主著書：『論理的に考える力を引き出す』（一声社）

『絵本で育てる情報分析力』（一声社）

『イラスト版ロジカルコミュニケーション』（合同出版）

『外国語を身につけるための日本語レッスン』（白水社）他

<メモ>

絵本で育てる考える力・話す力

年少者の日本語教育

つくば言語技術教育研究所

三森ゆりか

0. 今日のテーマ

- (1) 年少者の言語能力を育てるのに最適な絵本
- (2) 物語の構造
- (3) 絵の説明と分析・・・「曲芸師のいる市場」
- (4) 絵本の分析・・・「手の中のすずめ」

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

1. 年少者の言語能力を育てるのに最適な絵本

- ① テキストと絵で構成される絵本
- ② 本当は難しい絵本のテキスト
- ③ 幼い子供ほど絵を読む能力は高い
- ④ 大人と子供が対話をしながら自然に言語能力を育成できる媒体

2. 物語の構造

- ① 冒頭
- ② 発端
- ③ 山場の始まり部分
- ④ 山場の展開部分
- ⑤ クライマックス
- ⑥ 結末
- ⑦ 終わり

【参照「絵本で育てる情報分析力」(一声社)小著 p113~127】

3. 絵の説明と分析・・・「曲芸師のいる市場」

(1) 絵の説明

- * 「何が描いてあるか？」に答える
- * 説明の方法： 全体から部分へ
設定から個別の登場（人）物へ

(2) 絵の分析

- * 「絵は何を意味するのか？」に答える
- * 「絵の分析」の手掛かり

- ① テーマ（主題）
- ② 設定：場所・季節・天気・時間・時代背景など
- ③ 人物・動物・物
描かれた人物等の外面
描かれた人物等の内面
- ④ 象徴
- ⑤ 色彩・色調
- ⑥ タッチ
- ⑦ 構図

- * 分析の方法： 大きい情報から小さい情報へ
絵は全体から細部へと分析する

【参照：同掲書「曲芸師のいる市場」p99~105】

4. 絵本の分析・・・「手の中のすずめ」

- * 絵本を読み聞かせながら、巧みにテキストや絵について質問を挟む
- * テキストについては構造を意識して発問
- * 絵については「分析の手掛かり」を意識して発問

第5分科会（グリーンホール）

- テーマ：「地域の日本語学習支援の方法－授業のヒント－」
- 趣旨：地域の日本語学習支援の現場において最近活用されつつある参加型学習の方法や、音楽的手法を活用した学習方法について照会するとともに、学習環境の整え方について考える。
- 講師：伊東祐郎（東京外国語大学教授）
吉田千寿子（「ことばの会」「東海日本語ネットワーク」会員（敬称略））

伊東 祐郎（いとう すけろう）

東京外国語大学 留学生日本語教育センター教授

専門：日本語教育学，応用言語学（テスト研究）

略歴等：米国西イリノイ大学大学院言語教育学修士課程修了後，アラバマ大学外国語センター，並びに同大学衛星放送センターにて日本語教育を担当。平成4（1992）年から現在まで東京外国語大学での日本語教育に従事。平成8（1996）年から4年間，旧文部省教育助成局海外子女教育専門官（併任）として，外国人子女に対する日本語教育関連施策への助言及び企画等に参加。日本語能力試験の分析，ならびに日本語口頭能力試験の研究開発に従事。現在，放送大学テレビ「日本語Ⅰ」，同ラジオ「日本語Ⅱ」を担当。日本語教育学会常任理事を務める。平成14（2002）年度から文化庁が設置する「学校の余裕教室等を活用した親子参加型日本語教室の開設事業企画・評価会議」の座長を務める。

主著書：『ようこそ日本の学校へ』（共同執筆：文部省・ぎょうせい）

『外国人児童生徒のための日本語指導

－カリキュラム・ガイドラインと評価－』（共同執筆：ぎょうせい）

『日本語Ⅰ』『日本語Ⅱ』放送大学印刷教材（共著：放送大学教育振興会）

『言語テスト概論』邦訳（監訳：スリーエーネットワーク）近刊

吉田 千寿子（よしだ ちずこ）

独立行政法人産業技術総合研究所中部センター日本語教室講師

東海日本語ネットワーク会員

略歴等：小学生のころから作詞作曲を始める。大学（経済専攻）在学中，第17回ヤマハポピュラーソングコンテストつま恋本選会にて優秀曲賞受賞。卒業後はヤマハ音楽教室指導部に勤務。結婚後退職し，夫の海外赴任先の米国生活（1988～1990）で“ボランティアの精神”に共鳴。平成7（1995）年より日本語ボランティア教室「ことばの会」にて活動中。日本語教育能力検定試験合格。数年前より作り始めた日本語学習のための“オリジナル歌唱教材”が，アルクの月刊誌『日本語ジャーナル』に連載中（本年4月号より1年間）。

<メモ>

<メモ>

第5分科会「地域の日本語学習支援の方法 - 授業のヒント -」 ～人間関係づくりアプローチ～

伊東祐郎(東京外国語大学), 杉澤経子(武蔵野市国際交流協会)

本分科会では、地域における日本語学習活動において、支援者と学習者が「先生」と「生徒」の関係ではなく、地域に暮らす対等な市民として活動できる方法として効果が期待できる参加型学習の手法を紹介し、その活用によって地域日本語教育が多文化共生社会構築に貢献できる可能性について検討を試みたい。

1 日本語ボランティアは多文化共生社会構築の担い手

1980年代後半以降の日本における急速な国際化の中で、各地域には定住化する外国人が増加し、それに伴って、市民ボランティアによる日本語学習支援の活動が活発に行われるようになった。これらの日本語ボランティアの活動は、大学や日本語学校のような教育機関とは違い、地域に暮らす日本人と外国人が同じ市民という立場で、しかも日常的かつ継続的に接触交流する場になっている。このような地域活動は恐らく日本全国を見渡しても他にはないのではないだろうか。だとしたら、日本語ボランティアは、今後の日本社会の「多文化共生」の有り様を左右するほどの大きな存在といえる。日本における多文化共生社会の構築の鍵は地域の日本語の現場にあるかもしれない……。

2 対等な人間関係づくりを目指して

地域の日本語教室は、市民ボランティアも各国の外国人も「自らの意志」で集ってくる、まさに、多文化の人々が同じ市民という立場で集い合い活動する場だ。ところが、日本語を教える活動という性格上、また、これまで日本で行われてきた、「講義型」「知識伝達型」の手法では教師が生徒に教えるという一方通行の活動に陥りやすく、どうしても「先生」と「生徒」といった上下の人間関係になりやすい。また、日本に暮らす外国人は問題を抱えたときに最も相談しやすい日本人は身近かな日本語ボランティアであるケースが多く、上下関係まではいかないにしても外国人は常に支援を受ける側に置かれやすいという課題を抱えている。

そこで武蔵野市国際交流協会(MIA)では、日本語学習活動の中で、同じ地域に暮らす市民としての「対等な人間関係」が構築でき、多文化共生社会実現に貢献できる可能性のある学習法として、開発教育で行われている「参加型学習」の手法の導入の可能性を検討してきた。

3 参加型学習と教師の役割

開発教育は、1960年代にヨーロッパや北米で始められた教育活動で、「共に生きることのできる公正な社会づくり」をめざした教育活動として定着してきた。その中で紹介される「参加型学習」とは、教室という狭い限られた空間の中にあっても、比較的手軽に学習者の学習過程への参加を促すことができる学習法で、その特徴は、学習者の緊張を解きながら、学習者がもっている知識や経験、考えを引き出し、相互の意見交流・理解を促進し、そしてその「プロセス」の中で、参加者が相互に新たな気づきや発見をしていくことを大切にしていることだ。その中で、本研究で

注目した手法は、セルフエスティーム、コミュニケーション、コーポレーションの3つの能力を基礎目標とした「人間関係づくりアプローチ」の理念にもとづいたものである。

また、参加型学習を進める際に教師に求められる役割は、日本語の文法を教えるといった知識の伝達者ではなく、「ファシリテータ」である。ファシリテータとは、進行役というよりも、対話を生み出すためのきっかけづくりとしていくつかの手法を活用し、学習者の経験や意見を引き出しつつも自らも意見などを示し、対話を通じた学び合いに参加していく人のことをいう。参加型学習では、このファシリテータを除いては、学習者も支援者も同じ立場の参加者となり、また、ファシリテータは、参加者それぞれの考えや意見を引き出しながら、相互に学び合う双方向の関係性を育む役割を担うことになる。

4 日本語教室のための4つの手法とその留意点

3年間にわたって実践研究を行ってきた結果、

- (1) 部屋の四隅
- (2) いいとこさがし
- (3) フォトランゲージ
- (4) 二頭のロバ

といった4つの手法は学習者の生の声を引き出すのに、想像以上の効果があることがわかってきた。本発表でそのいくつかを紹介するが、これらの参加型学習の手法を使って活動する際には、次の点に留意しなければならない。

- (1) 日本語学習支援者の立場は日本語を教える教師ではなく、「ファシリテータ」（参加者の考え方や意見の引き出し役）であること。
- (2) ファシリテータ役を担う人以外は学習者も学習支援者も全員同じ立場で参加すること。
- (3) 活動は日本語で行うが、その目的はどれだけ参加者（学習者と支援者の全員）間で意見交換や交流が行われ、よりよい人間関係が築けるかということ（結果として日本語習得のモチベーションが高まり学習が進むことは大いにありうるが、その理念を忘れて手法だけが先行しないように留意が必要）。

5 日本語教育との違いと関連性

日本語教育では、コミュニケーション力を身につけるには、課題中心の学習に取り組むことが多い。課題中心の学習というのは、アクティビティと呼ばれる学習活動である。アクティビティは、与えられた課題を達成するための、いわゆる「参加型」学習活動の一形態である。内容重視の指導法や課題重視の指導法とリンクして数多くのアクティビティが考案されている。言語の形式（文法や語彙、発音）に焦点を当てるのではなく、意味のあるやりとりに焦点をあてているのが特徴で、言葉は使うことで習得されるものであるという考えが基本にある。

地域日本語教育への「参加型学習」導入の目指すところは、地域住民の多文化社会における異文化間コミュニケーション力を高めることにある。要するに、日本語によって個人の持つ様々な力を引き出すことにあるのだ。そこでは、日本語を母語とするボランティアが必ずしも優位な立場になることはなく、ましてや日本語教師という役割をもつ者も存在しない。参加型学習の導入の第一目的が、多文化社会に生活する住民個々人の個性や資質、能力を発信しつつ日本語力を高め、他者との関わりを築き上げていくことにあるからで、ここが学校等における日本語教育とは異なる点である。そして、アクティビティに参加することによって、自己発信、自己表現を実現し、また同時に隣人の考え方、見方に触れて他者を理解すること、自己を振り返ること、そして参加者同士が新たな学びを発見することが期待されているのだ。地域社会で共に暮らすボランティアと外国人双方にとってのコミュニケーション機会の創出、相互の学習の場づくりという観点からの新たなアプローチである。自発的な発話を促す手法を導入することによって、有意味な対

話を喚起し、人間関係作りと日本語習得を促進させられる「参加型学習 - 日本語教育版」として位置付けたい。

【注】

本説明文と発表内容は、異文化間教育学会第25回大会で発表したものに手をくわえたものであることをお断りしておく。

(ワークショップ協力者：河北祐子、宮崎妙子)

【参考文献】

- 『多文化共生のコミュニケーション』, 2002 (アルク)
- 『日本語教育学を学ぶ人のために』, 2001 (世界思想社)
- 『人間主義の日本語教育』, 2003 (凡人社)
- 『わくわく開発教育 - 参加型学習へのヒント』, 2001 (開発教育協議会)
- 『わ〜い！外国人が教室にやってきた！ - 学校と地域がつくる国際理解教育』, 2002 (武蔵野市国際交流協会)
- 『わ〜い！NGOが教室にやってきた！ - 学校と地域がつくる国際理解教育』, 2003 (武蔵野市国際交流協会)
- 『やってみよう「参加型学習」！日本語教室のための4つの手法〜理論と実践』, (近刊) (スリーエーネットワーク) むさしの参加型学習実践研究会著

◆「参加型学習」ファシリテータ・ステップアップ講座◆

対象：日本語学習支援活動を行っている方 約100名

参加費：無料, 入場自由

日時：11月6日(土) 10時~12時

場所：スイング10階 (JR武蔵境駅北口駅前ビル)

主催：武蔵野市国際交流協会, TAMA日本語共育ネットワーク

問合せ：0422-36-4511 (MIA)

むさしの国際交流まつり同時開催

「地域の日本語学習支援の方法ー授業のヒントー」
～オリジナル歌教材を使って～

吉田千寿子(ことばの会)

- (1) なぜボランティア? なぜ歌教材? …… 日本語ボランティアを始めたきっかけや、歌教材を作ろうとした動機について。
- (2) ”オリジナル歌教材”とは?
★聴いて歌って覚えよう!★ …… 繰り返し歌うことにより、語彙や文型などが、発音のポイントとともに楽しく覚えられるよう工夫し、創作された、日本語学習のためのオリジナル歌教材。

二 〇四年4月号より、アルクの月刊誌『日本語ジャーナル』に連載中 二

★5つのコンセプト★

- 1) メロディーは、できるだけ話す時と同じアクセント・イントネーションに。
- 2) 模倣して歌える「*エコーソング」のスタイルで。
- 3) 学習順序に沿った語彙・文型の使用。
- 4) 繰り返し聴いたり歌ったりしたくなるような、音楽的に魅力あるポップな楽曲、美しい楽曲に。
- 5) 学習者が、場面や登場人物の気持ちを想像したり、自分と比較して考えを述べられるようなストーリー性のある歌詞を(曲によっては、当てはまらない場合もあります)。

*エコーソング: ♪ある日→ある日、森の中→森の中、クマさんに→クマさんに、出会った→出会った……の要領で、すぐにリピート練習できる歌。

- (3) ♪歌いましょう!♪ …… 歌いながら、学習テーマや留意点を理解していただきます。

「空からの贈りもの」
「あしたはわたしの誕生日」(5月号)
「鈴木さんのご家族」(9月号)
「いっぼん!」(4月号)

- (4) レッソンの実際 …… 授業の様子をビデオで紹介し、歌教材の使い方について具体的に解説します。

「おまかせロボット第1号」ほか

- (5) その他の曲紹介

★音楽性を大切に、さまざまなジャンルの曲を創作★

「お客さまがいらっしゃいます」
「キラキラ」
「潮風に誘われて」(6月号)
「泣かないで」(10月号) など

♪歌って踊りましょう!♪
「踊ってサンバ」(7月号)

～日本語ジャーナルより～
今日お配りした日本語ジャーナル4月号は、本連載の第1回目を収めた号です。
聞き取りと口慣らしの練習用教材としてクラスで使ってみてください。

♪ 曲名リスト ♪

<曲名>

<学習テーマ>

<対象レベル>

(L:「みんなの日本語」での第～課)
初級

- | | | | |
|-----|----------------|----------------------------|-------------------|
| 1) | 「あいうえおの歌」 | * 5つの母音&さ・た・は行 etc.の練習 | |
| 2) | 「あしたはわたしの誕生日」 | * ついたち、ふつか、みっか… | 初級 (L 5) |
| 3) | 「空からのおくりもの」 | * ひとつ、ふたつ、みっつ… | 初級 (L 11) |
| 4) | 「鈴木さんのご家族」 | * 年齢&家族の呼称 | 初級 (L 7・11・24) |
| 5) | 「踊ってサンバ」 | * 動詞のて形 | 初級 (L 14) |
| 6) | 「泣かないで」 | * 動詞のない形 | 初級 (L 17) |
| 7) | 「会いたくて」 | * 動詞の普通形 | 初級 (L 20) |
| 8) | 「君を守りたい」 | * 名詞修飾 | 初級 (L 22) & 中級 |
| 9) | 「お任せロボット第1号」 | * 自動詞&他動詞 | 初級 (L 29・30) & 中級 |
| 10) | 「潮風に誘われて」 | * 受け身 | 初級 (L 37) & 中級 |
| 11) | 「いっぱい!」 | * ～本/杯 | 初級 (L 40) & 中級 |
| 12) | 「お客様がいらっしゃいます」 | * 尊敬 | 初級 (L 49) & 中級 |
| 13) | 「キラキラ」 | * 擬音語&擬態語 (うろうろ・がっかり etc.) | 中級～ |
| 14) | 「家事する男はステキさ!」 | * ～てくれない? & ～てあげる | 中級～ |

第6分科会（80年館オーロラホール）

- テーマ：「学習者を支える教材の活用方法」
- 趣 旨：主として中上級レベルの学習者の自律学習用として本年4月から始まったNHKテレビ番組「新にほんごでくらそう」の活用方法について紹介するとともに、地域の日本語学習支援の現場で活用できる教材の特徴やその効果的な活用方法について検討する。
- 講 師：清 ルミ（常葉学園大学教授）（敬称略）

清 ルミ（せい るみ）

常葉学園大学外国語学部教授

専 門：日本語教育学，異文化コミュニケーション学

略歴等：成蹊大学大学院修士課程修了。ニューヨークHB Studioで演劇を学ぶ。

米国国務省日本語研修所専任教官，産能短大，早稲田大学講師を経て平成10（1998）年4月より常葉学園大学助教授，平成15（2003）年より現職。昭和63（1988）年より日欧産業協力センター（欧州連合経済産業省合同プログラムEU加盟国ビジネスピープル管理職対象）日本言語文化研修責任者を兼職。企業研修アドバイザー，日本語教師再教育社会人（会社員，国際交流員，介護士，医療従事者，母親など）対象のコミュニケーション教育にも従事。日本時事英語学会理事。

平成11（1999）年度と平成12（2000）年度の「文化庁日本語教育衛星通信講座」講師，平成12（2000）年度，14（2002）年度及び15（2003）年度の「文化庁日本語教育大会シンポジウム」のパネリスト，平成14（2002）年度の同大会分科会講師を務めた。

現在NHK教育テレビ日本語講座の講師を務めている。

主著等：『Crash Course Japanese for Business』（アルク）

『創造的授業の発想と着眼点』（アルク）

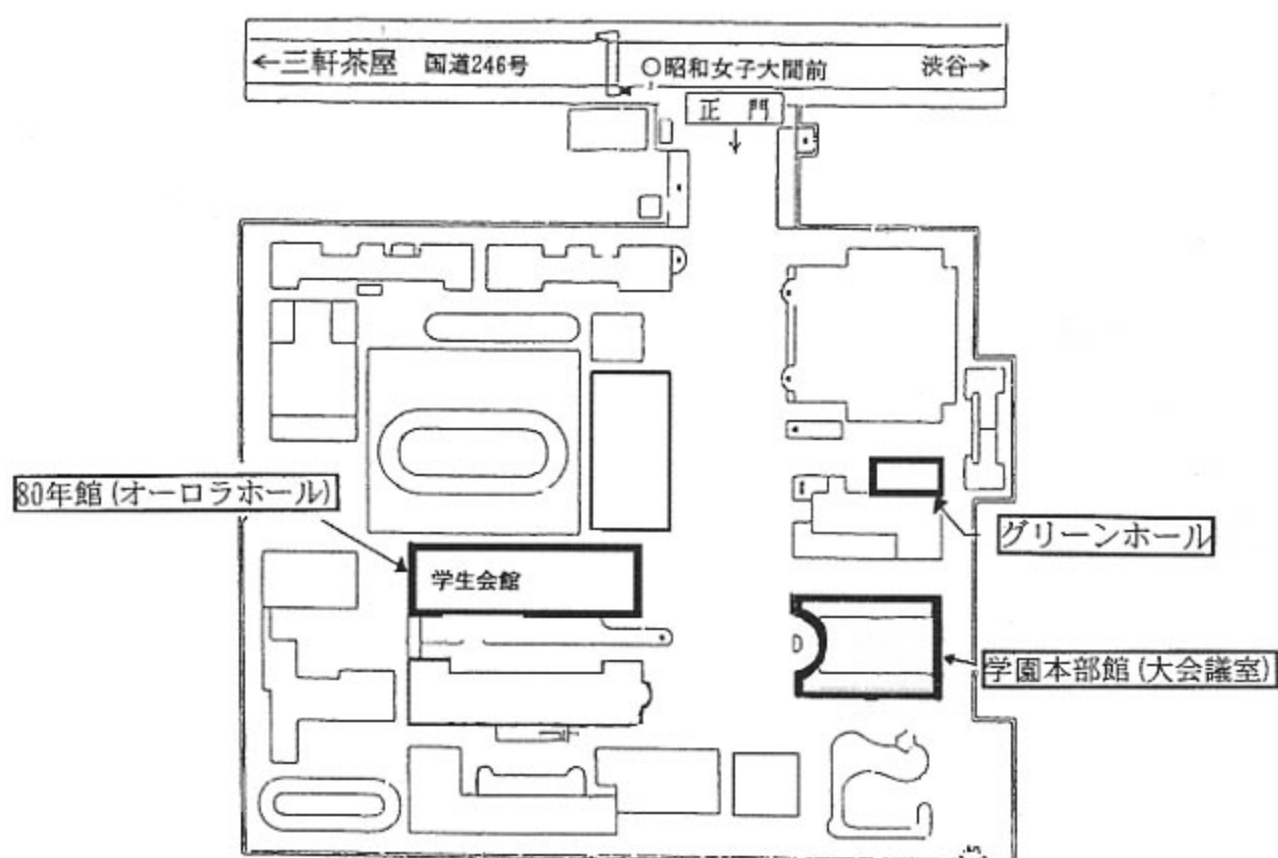
『ビデオ・教え方のコツ』（アルク）

『コミュニケーション教育の現状と課題』（共著，英潮社）

『新にほんごでくらそう』テキスト（NHK出版） 他

<メモ>

昭和女子大学 構内図



※構内は、原則、禁煙、飲食禁止です。飲食は学生会館のホールでお願いします。

8月4日(水)

日本語教育研究協議会(分科会)	会 場
第1分科会 大蔵守久(財団法人波多野ファミリスクール主管) 「年少者への日本語習得支援について考える」	グリーンホール
第2分科会 松本 茂(東海大学教授) 「地域の日本語学習支援の方法 - 施策の展開 -」	80年館(オーロラホール)
第3分科会 渡辺文夫(上智大学教授) 「異文化間カウンセリングの活用 - 判断留保(エポケー)の実践 -」	学園本部館(大会議室)
第4分科会 三森ゆりか(つくば言語技術教育研究所所長) 「年少者への日本語習得支援の関係者を支える知識・技術・心構え」	学園本部館(大会議室)
第5分科会 伊東祐郎(東京外国語大学教授) 吉田千寿子(「ことばの会」「東海日本語ネットワーク」会員) 「地域の日本語学習支援の方法 - 授業のヒント -」	グリーンホール
第6分科会 清 ルミ(常葉学園大学教授) 「学習者を支える教材の活用方法」	80年館(オーロラホール)